

浄蔵浄眼御消息

弘安三年七月七日 五九歳

生米きごめの俵一つ・瓜籠うりこ一つ・根芋ねいも、品々の物給たび候おわひ畢おわんぬ。

楽徳らくとくと名付なけゝる長者ちやうじやに身を入れて我が身も妻も子も、夜も昼も責つかめ遣つかはれける者が、余りに責つかめられ堪たへがたさに、隠かくれて他国たがくにに行きて其の国の大王みやづかに宮仕みやつかへける程に、きりものに成なりて関白せきやくと成なりぬ。後に其の国を力として我が本の主の国を打ち取りぬ。其の時、本の主、此の関白せきやくを見て大いに怖おそれ、前まへに悪あくしく当あたりぬるを悔くひかへして宮仕みやつかへ、様々の財たからを引ひきける。前まへに負まかけぬる物の事は思おもひもよらず、今は只命ただいのちのいきん事ことをはげむ。法華経も又斯くの如く、法華経は東方の薬師仏の主、南方西方北方上下の一切の仏の主なり。釈迦仏等の仏の法華経の文字を敬うやみ給たまふことは、民の王を恐れ、星の月を敬うやみ給たまふが如し。

然るに我等衆生は第六天の魔王の相伝さうでんの者、地獄・餓鬼・畜生等に押し籠こめられて気もつかず、朝夕獄卒ごくそつを付けて責とかむ程に、兎角とかくして法華経に懸かかり付きぬれば、釈迦仏等の十方の仏の御子みことせさせ給たまへば、梵王・帝釈だにも恐おそれて寄り付よりかず、何に況いかんや第六天の魔王をや。魔王は前まへには主しゅなりしかども、今は敬おそみ畏おそれて、あしうせば法華経十方の諸仏の御見参みさんにあしうや入いらんずらんと、恐おそれ畏おそみて供養くやうをなすなり。何にしても六道の一切衆生をば、法華経へつけじとはげむなり。

然るに何なる事にやをはずらん、皆人の憎にくみ候日蓮ふびんを不便ふびんとおぼして、かく遙々はるばると山中へ種々の物送りたび候事、一度二度ならず。たゞごとにあらず、偏ひとへに釈迦仏の入り替かはらせ給たまへるか。又をくれさせ給たまひける御君達きんだちの御仏みぶつにならせ給たまひて、父母を導いかんために御心みこころに入り替かはらせ給たまへるか。

妙みょう 莊じやう 嚴王げんわうと申まをせし王わうは悪王あくわうなりしかども、御太子みとうし 浄蔵じやうざう・浄眼じやうげんの導いかせ給たまひしかば、父母二人共に法華経を御信用ごしんよう有りて、仏にならせ給たまひしぞかし。是もさにてや候らん。あやしく覚え候。甲斐公かたちが語りしは、常の人よりもみめ形かたちも勝かれて候まをひし上、心こころも直なおくて智慧賢く、何事に付けてもゆよしかりし人の、疾とくはかなく成なりし事の哀あはれさよと思おもひ候まをひしが、又また 情つらつら 思おもへば、此の子なき故ゆゑに母も道心者みちこころしやとなり、父も後世者ごせしやに成なりて候まをひは只とも覚え候まをはぬに、又また 皆人の悪にくみ候法華経に付つかせ給たまへば、偏ひとへに是なき人の二人の御身みみに添そひて勸まをめ進まいらせられ候まをひにやと申まをせしが、さもやと覚え候まを。前まへ々は只荒増さきざきの事ことかと思おもひて候まをへば、是程御志ごしの深く候まをひける事は始めて知しりて候まを。又若しもしやの事候まをはゞ、くらき闇くらに月の出あづるが如く、妙法蓮華経の五字、月あらと露あはれさせ給たまふべし。其の月の中には釈迦仏・十方の諸仏、乃至前まへに立たせ給たまひし御子息みこの露あはれさせ給たまふべしと思おもひ召まをせ。委くわしくは又々申まをすべし。恐々謹言。

七月七日

日 蓮 花 押